



くだらないことだった。サトルの携帯電話をなにげなく見てしまった私が悪かった。

シャワーを浴びてバスルームから出てきたサトルが、バスタオルで髪をくしゃくしゃに拭きながら、ゆっくりと近づいてきた。そして、私の手から携帯電話を奪うようにして取った。

「チェックしてた？」

目の前にしゃがみ込んで、私の顔を覗き込んだ。

「誰、優美って？」

サトルは、私の質問には答えずに、

「携帯見たのな。俺、信用されてない？」

と逆に聞き返した。

そして、冷蔵庫から缶ビールをとり出して、プルタブを引き上げた。ビールが少し噴き出して床にこぼれた。私が昨日、買ってきたばかりの缶ビールを床に落としたからだろうと思った。サトルは、髪を拭いていたバスタオルでこぼれたビールを拭くと、バスタオルを洗濯籠に投げ込んだ。

「ねえってば、サトル。答えられないの？」

追い討ちをかけるように問いただした私を、サトルが責めるような目で見つめている。それなのに私、サトルの目ってほんときれいだなあ、なんて場違いなことを考えている。サトルは黙って、ただ、私を見据えている。私は、立ち上がると玄関までわざとらしくどたどたと音をたてて歩いた。そして、スニーカーを履いてドアノブに手をかけた。それでも、サトルは私を止めようとしなかった。私は部屋を出て行くしかなかった。

むしゃくしゃしながら歩いていた私の体はいつの間にか汗ばんでいた。夜とはいえ、まだ夏。夜だというのに騒ぎ立てるセミの音が、なおさら暑さを際立たせては私を苛立たせる。なんで止めてくれないかなあ、ばか。そんなセリフが頭に浮かんでは消え、そして、また、浮かぶ。知らない女の名前が携帯電話に残っていたくらい、本当はなんてことなかった。携帯電話を覗き見ていたところを見られてしまって、ばつが悪かっただけ。後ろめたさを隠すために怒ったフリを試みただけ。私の携帯電話にだって、サトルの知らない男の連絡先が入っているんだもの。そんなことでいちいち文句を言うつもりはない。第一、サトルのことは誰よりも信用している。ただ、出て行こうとする私を止めなかったことに関しては、サトルの落ち度だと文句を言ってやりたい。

ひたすら歩いているうちに、駅に着いた。駅前のロータリーの誰も座っていないバス乗り場のベンチに腰掛けると、汗が幾筋も額から流れた。とにかく喉が渴いてしかたがない。ひとまず、近くにあるふたりの行きつけのバーに行くことにして額の汗をTシャツの袖でぬぐい、腰を上げてまた歩き始めた。

「いらっしやい」

カウンターの奥でグラスを洗っていたマスターが、不敵な笑みで私を迎えた。

「いつものでいいよね」

カウンターに座った私の前に、冷えたグラスになみなみと注がれた黒ビールが置かれた。私は、喉を鳴らしてそれを飲み干して、口ひげのように付いた茶色い泡を手の甲でぬぐいとった。子どもをあやすような表情でその様子を見守っていたマスターが、私に黒ビールをもう一杯、注い

でくれた。そして、オレも一杯飲むか、とグラスに黒ビールを注ぐと、乾杯、とグラスを差し出した。その黒ビールの入ったグラスにオレンジの照明が映りこみ、きらきらと輝いている。きれい。サトルの目みたい。黒ビールの漆黒が、ふいにさっきのサトルの目を思い出させて、私を動揺させた。

「あっ」

声を漏らした私に、

「財布忘れたでしょ？」

とマスターがすかさず答え、少し間をおいて、サトルから連絡あったよ、と付け足した。

その言葉があまりにも意外で、瞬間、胸が高鳴った。財布も携帯電話も持たずに出てきたことをすっかり忘れていた。私は、恥ずかしいやら、うれしいやらで、いてもたってもいられなくなった。一気にお酒を飲み干してマスターに礼を言うと、あわてて店を飛び出た。そして、さっきまであんなに嫌だった暑さも気にせずに、全速力で走りだした。こんな日にかぎってスニーカーを履いて出てきた自分が、ちょっぴり誇らしい。早く帰ってサトルに謝りたい。許してくれるかわかんないけど、とにかくサトルに謝ろう。

汗でTシャツが体に張りついている。でも、気持ち悪いだなんて言うてはいられない。いまごろ、サトルはよく冷えた缶ビールと大好きな柿ピーに手を伸ばしつつ、いつもの場所に寝転がってテレビを観ているに違いない。そんな日常の平和な光景が脳裏に映し出され、思わず涙ぐみそうになる。

クーラーで冷えたサトルの部屋が、懐かしくてたまらなかった。